

「死の知らせ」

河合 香吏

1994年10月。私は2年半ぶりのフィールドにもどり、一週間を過ごしていた。ケニアの中央部、グレートリフトバレーのなかに点在する湖のひとつであるバリンゴ湖の周囲で半農半牧の生活を送るチャムスという人びとが、1986年以來の私の調査対象であった。

肌寒い朝だった。まだ薄暗い家畜囲いのまえではんやりと搾乳の風景をながめていた私に、炉で火を起こしていた第3夫人が、たったいま伝令にきた少年の言葉をつたえた。

「おじいさんが息子たちに招集をかけたらしいよ。夫にもでかけるようにいわなくちゃ」

一昨日の土曜日に、私はその老人を120キロメートルほど離れた町の病院に車で連れていったばかりだった。彼は私が住みこんでいるホームステッドの家長の父親である。もともと痩せていて、おなじ年齢組の男たちとくらべ、ずいぶん年老いてみえる人だった。ただ、以前になく体力が衰えているといい、ほとんどひとりでは起きあがれない様子や、2年半ぶりにもどってきた私に熱心に近況を語る彼の声がかすれて聞きとれない状態であることが気にかかった。病院での診断の結果は、おもにマラリアによる貧血と脾臓肥大であった。カレンジン出身の若い医者とは、半年ほど投薬をつづけてゆく治療方針をとり、数週間分の薬を処方した。致命的な疾患ではないことがわかり、つき添った人びととともに、私はほっとした気分チャムスランドに帰ってきたのだった。

その彼が月曜日になって招集をかけてきたのだ。彼の息子たちは末子を残してすべて結婚し、それぞれにホームステッドを構えている。

「おじいさんは息子たちを集めて、いったいなにをしようというの？」

「ンキトゥジュンゴじゃあないかしら」

「ンキトゥジュンゴ？だって彼はまだ・・・」

「おじいさんは自分が死ぬと思っているのよ」

第3夫人は、紅茶を煮たてながら不吉なことをいいます。

「きっと声がでなくなって驚いたのだと思う。彼は自分がいつだって死ぬ（ことがありうる）と考えているのよ。たとえそれがずっと先でもね」

「ンキトゥジュンゴ」とは、正確にいえば「ロモン・レ・ンキトゥジュンゴ」のことであり、文字どおりには「相続に関する話」とでも訳せようか。この言葉をはじめて聞いたのは、さらに四年ほどまえのことである。

死を覚悟した者が、自分の家畜をどのように分配するのか、人に貸している家畜を回収する権利や、受けとりが遅れている婚資の家畜にたいする権利をだれに譲渡するのか、逆に人から借りている家畜の返済をだれに任せるのか等、財産に関する問題について、息子たちを集めて指示をだす。チャムスでは家畜は原則として家長が所有するものであり、だれにどれだけの家畜が貸しだされておき、またどの家畜がだれから借りたものなのかといったことを、家長以外のメンバーはほとんど



午前7時、放牧にでかけるヤギの群れを追う。

知らない。家長はこれらの情報を、死ぬ直前まで語らないものだという。ロモン・レ・ンキトゥジュンゴには、財産にかかわる問題以外にも、彼の死後に未亡人となる妻や子どもたちがどこに住み、その世話がだれに託されるのか等、残される者たちの生活に関する話がふくまれる。

死ぬまえにやらなければならないことはたくさんある。チャムスは日頃から呪術に悩まされて生活している人びとではないが、それでもいくつかの「正当とされる」呪術が存在する。たとえば「ルデクタ」は、親子や兄弟、おなじ年齢組のメンバーなど親しい者同士のあいだで行使され、非がある相手にたいして面とむかって怒りと呪いの言葉を投げつけるものである。こうした呪詛に関する問題もまた、ロモン・レ・ンキトゥジュンゴであつかわれる。

ルデクタは、呪詛をかけられた者が自らの非を認めて謝罪し、呪詛をかけた者が彼を赦して祝福をあたえることによって解かれるものなのだが、呪詛をかけた者が死んでしまうと呪い解きは永遠に不可能になる。チャムスは死のまえに、呪いをかけた相手呼びだし、和解を成立させて呪いを

解こうとする。

いっぽう、自分の死後に残される妻や子どもたちをわずらわせるであろうと考えられる人物には呪いをかけておかなければならない。若い妻や幼い子どもから家畜をまきあげようとたくらんでいる輩がいるものである。そうした危険だと思われる相手呼びだして、彼の目のまえで搾ったミルクに話しかける。

「おまえはウシやお金や物を欲して私の妻や子どもたちを悩ませる。その行為をやめよ。二度とくりかえさぬがよい。このミルクがみているだろう。もしもおまえが同じことをしたときには、このミルクがおまえを殺すだろう」

そうしてミルクに唾を吐きかけ、相手に飲ませる。呪詛によって残される者たちを護るのである。

つぎに、親族の者たち全員を集めて、口にふくんだミルクや唾を吐きかける祝福「マイヤン」をあたえる。これは同時に彼らにたいして自分が不満や怒りをなにひとつもっていないことをしめす行為でもある。

これらをすませたのちにおこなうことは、ビー

ズ的首飾りやイヤリング、手足につけた真鍮の輪などの装飾品をはずし、髪を剃ることである。これを「ソラタ」といい、身につけたものすべてを取りはずすことを意味する。

「人はなにももたずに死ぬものだ」とチャムスという。財産をめぐる問題も、他者にたいする過去の怒りも残る者たちの将来に関する気がかりも、人生の節目節目に身につけ加えられてきた装身具とともに取りのぞかれてゆく。それは身辺整理であるとともに、さまざまな感情を昇華してゆく「心」辺整理なのだろうか。

これまでに何度か人の死に出会った。とくに1990年から1992年にかけての2年間には、親しくしてきた人びとが4人も亡くなった。

「腹水が溜まる病気」で亡くなった年配女性は、民間薬のみを頼り近代医療を断固として拒んだ。また、預言者にして呪医でもあるロイボーニの治療も受けようとはしなかった。彼女は死の1週間ほどまえになって、はじめてロイボーニのもとに人を送った。私は彼女が自分の病状に危機感を抱いて民間薬以外の医療を試みはじめたのだと考え、いまなら彼女を説得して病院に連れてゆくことができるかもしれないと思った。ところが、彼女はロイボーニの治療を受ける気になつたのではなかった。彼女は自分がほんとうに死ぬのかどうかを知ろうとしたのだった。預言者であるロイボーニにはそれがわかる。彼女は病気から救われようとしたのではなく、「死の確認」をロイボーニに求めたのだった。信じられない思いでいた私にたいして、人びとは「突然死んでしまうのはよくないことだ」と説明した。数日後に、彼女は幼い子どもをふくむ親族の者たちを集めて「マイヤン」をし、仲たがいをしてきた次男の第1夫人を呼んで特別の祝福をあたえた。

私が住みこんでいたホームステッドの年配女性もまた、1991年の乾季に亡くなった。長く結核をわずらっており、町の病院に入院していた時期もあるが、燻煙消毒をしたミルクが飲めない病院の食事がつらいといってホームステッドにもどつて

きていた。彼女はその後1年ほどのあいだ、水汲みや薪採りなどの労働こそしなかったが、「見舞い」と称して毎日のように訪れる客たちとにぎやかに話をしたり、ミルクをいれる容器をつくったりビーズ細工をしたりして過ごしていた。

彼女の死は私にとってあまりに突然だった。前日の午後には、同居していた長男の未亡人と私は、彼女をひなたに連れだしてそのからだをお湯で洗った。その夜、彼女は食欲がないといって夕飯をとらずに眠ったが、長男の未亡人と私は、彼女の病気はどのようなものなのだろうか、あしたは彼女が好きな酸乳をつくって飲ませようなどと夜が更けるまで話しこんだ。彼女の死の知らせを聞いて大声をあげたのは私ひとりだった。朝起きて義母の死をみとめた長男の未亡人は、「私はずっと彼女といっしょにいた。食事をつくり、からだを洗った。私は彼女が死ぬことを知っていた。だから泣かなかった」と言葉を選ぶようにいった。

彼女は10日以上もまえに髪を剃っていた。そしてからだからビーズや真鍮の輪をはずしていた。それが死にむかう行為「ソラタ」であることを知らなかったのは、私だけだったにちがいない。彼女が髪を剃り、ビーズをはずしていることには気づいていた。私は、ベッドに横になることが多い彼女には、長く伸びた髪やかさばる装身具は邪魔なのだろうと、即物的な解釈をしていたように思う。ソラタはそれほどにさりげない行為だった。

彼女の死から1カ月以上が過ぎたある日、私は20キロメートルほど離れたホームステッドに嫁いだ彼女の末娘を訪ねた。娘は、「母が死んだという知らせを私はただ黙って聞いた。ひとりになってから声をださずに少しだけ泣いた。私は母が死ぬことをロイボーニから聞いていたのよ」といった。母がソラタをすませていたことも知っていたという。娘は、母が近いうちに死んでしまうことを母の死に先んじて知っていた。彼女の死や葬礼に立ちあわなかった親族の人びとがみんなそうであったように、この娘もまた、母がなぜ死んだのかではなく、いかに死んだのかを私にたずねた。

死がまえもって知らされることにより、残された者は親しい者の死を穏やかに受け入れることができるかともいうのだろうか。いっぽうで、予期されぬ死が、残された人びとに激しい動揺をもたらすことを私は目のあたりにしてきた。私が住みこんでいたホームステッドから嫁いでいった娘の死が知らされたときのことだ。突然の号泣、そしてそれを鎮めるためにかけつけた人びとが投げかけた言葉を、私は忘れることができない。

人びとは、泣き崩れる者にたいして「黙りなさい」とくりかえした。宙を仰いで泣きくれる者の肩を抱きかかえながら「お腹にしまいなさい。泣いてはいけない。黙りなさい。病気になってしまふよ。悲しむことはあなた自身のからだによくない」と懸命に語りつづけた。そして「さあ、立って火を起こしにいきなさい。紅茶をわかして飲みなさい」とたたみかけた。

「ここを平静にきなさい。お茶を飲み、食事をして、いつものように過ごきなさい」

門まで送りにでた私にそう言って、人びとは私たちを置き去りにした。

厳しすぎると思った。親族の死というこれ以上はない悲しみに際しても、彼らは嘆き悲しむことを禁じる。遺族を慰めるために人びとが集まることもない。この日、ホームステッドにはだれひとりとして訪ねてくる者はなく、静かに1日が流れていった。

ロモン・レ・ンキトゥジュンゴをはじめ、死をまえにしてなされるさまざまな行為は、死にゆく者本人の意志で行なわれる。ある形式と内容をそなえているという点で、それは人生のある時点においてだれもが迎えるべき通過儀礼であるかのようだ。人は通るべき過程として「死」を歩んでい

るようにみえる。そしてその歩みは、残される者たちが、死にゆく者によってその死を受容するよう導かれる過程でもあるのだ。

病院からもどってすぐに慌ただしくロモン・レ・ンキトゥジュンゴをはじめた老人は、その後、順調に回復していった。私がチャムスランドを離れる今年の1月半ばにはすっかり元気になり、朝、放牧に出かけてゆく家畜の群れを追ったり、夕方には放牧からもどってくる家畜を迎えにでたりするようになっていた。すでに「呪い解き」までをすませてしまった彼の「死の準備」は、どのように位置づけられているのだろうか。宙ぶらりんになっているのだろうか、それともいったんは取り消されたのだろうか。老人の早合点を、人びとはときどき揶揄したり茶化したりして笑う。

死をめぐる行為のありかたは、同時に人びとの生きざまを物語る。厳しくも恬澹な「死」にたいする態度は、乾いた熱い風が吹くチャムスの地に似合いすぎる。けれども、こうした勝手な言葉しかもたない私は、老人の行為を彼らのように笑いとばす気にはなれない。フィールドでの滞在が長くなれば、どうしても出会うことになる身近な人の死に際して、私は私の知っている感情に強く支配されるとともに、チャムスが「死」と「死」をめぐる感情をあつかうやりかたに身をまかせようとしてきた。それはことごとく失敗におわり、私はいつも混乱した。私がおそらくは共有していないであろう彼らの「死」へのまなざしと「死」をめぐる感情のいとなみをたどることは、いったいどのようにして可能となるのだろうか。

(かわい かおり)

京都大学アフリカ地域研究センター)